

『労働戦線』の創刊と編集事情(1)

松尾洋・佐藤茂久次氏に聞く

はじめに

- 1 産別会議への就職
- 2 『労働戦線』の創刊(以上本号)
- 3 編集・経営事情
- 4 後退期の『労働戦線』

はじめに

敗戦翌年の1946年8月19日、産別会議(全日本産業別労働組合会議)が結成された。産別会議は当時、労働組合の組織系統では左派系のナショナル・センターに位置したが、實際上、日本労働運動の軸を形成していた。産別会議の結成時における組織人員は、21単産・163万人(日本の組織労働者の42パーセント)で、同月に結成された右派系の総同盟の85万5000人の約2倍を擁していた。実際の運動でも、産別会議は労働者の生活と権利の確立をめざし、1946年の10月闘争をはじめ、47年の2・1スト、さらに産業復興闘争、労働法規改悪反対闘争、最低賃金制の確立、企業整備反対闘争、全面講和闘争などを展開し、政府および経営側とすどく対峙した。戦後初期、日本の労働運動は、いわば「産別会議の時代」を現出していた。

『労働戦線』は、この産別会議の機関紙として、1946年8月20日に創刊された。本稿で紹介する松尾洋氏は、この『労働戦線』の記者として労働戦線編集局に入れ、のち編集発行の名義人となった。佐藤茂久次氏も、労戦記者として、産別会議の後半期の運動を記録し報道された。

松尾・佐藤両氏からのヒアリングは、1981年11月4日、法政大学市ヶ谷キャンパス内80年館3階の大原社研会議室において行った。出席者は、産別会議研究会のメンバーのうち木下武男、桜井絹江、早川征一郎、平井陽一、吉田健二の5名である。本稿は、お二人の証言を吉田の責任において編集し、それに両氏が加筆・補正してまとめたものである。両氏のご協力に、心から感謝を申し上げます。

なお、『労働戦線』は、全労連の機関紙『労働新聞』『労働者』とともに、1973年7月に労働旬報社(現在は旬報社)より復刻されている。松尾洋氏は、その復刻版において「産別会議・全労連の運動と『労働戦線』『労働新聞』『労働者』」と題する解説を執筆されている。この解説では、たんに機関紙の創刊経緯や編集事情・廃刊の経緯だけでなく、産別会議と全労連の運動についても言及

されており、関心をお持ちの方は合わせてお読み頂きたい。本稿では、この松尾氏の解説とできるだけ重複しないように留意して編集した。

(吉田健二)

【松尾洋氏略歴】

1911(明治44)年8月、東京で生まれた。栃木県宇都宮市に転居し、旧制の下野中学に進学し文学青年として過ごす。在学中、全日本無産者芸術連盟(ナップ)の機関誌『戦旗』を直接購読していたことを、特高警察から学校に通報され、左翼学生とみなされ、成績も一挙に下げられた。1931(昭和6)年4月、法政大学予科に入学した。社会科学を学ぶ学内の読書会をへて、日本共産青年同盟(共青)に加入した。共青の法政大学班の活動などをへて共青本部の印刷局に移ったが、検挙され、諭旨退学処分となった。1934年9月から東京・江東地域で同人誌『文芸街』の発行に参加、文学運動を継続した。1936年7月いわゆる“コム・アカデミー事件”により、日本共産党の再建に協力したとして治安維持法違反の容疑で検挙された。1937年4月、思想犯保護観察法を適用されて釈放され、特高警察の監視下におかれた。1938年7月召集され、中国・武漢方面の戦線に動員され、40年6月漢口で召集解除となった。外地の銀行や商工会議所に就職して、調査などの活動に従事した。

1945年8月を中国・漢口で迎え、46年4月日本に帰還し、6月初め産別会議準備会の本部の事務局に入り、機関紙『労働戦線』の編集発行の名義人となった。1948年9月社団法人日本機関紙連合通信社の設立に参加し、労働記者として活躍した。1956年に日本労働運動の再検討の必要を痛感して退社し、以後、精力的に日本労働運動史研究に従事し、現在も埼玉県大宮市で元気に研究・執筆をなさっておられる。著書に『日本労働運動史』(日本労働協会、1964年)、大河内一男との共著『日本労働組合物語』(全5巻、筑摩書房、1965・69・73年)、『治安維持法 弾圧と抵抗の歴史』(新日本出版社、1971年)などがある。

【佐藤茂久次氏略歴】

1908(明治41)年8月29日、岡山県邑久郡国府町(現在は長船町)に生まれた。1927(昭和2)年3月岡山県立第一商業学校を卒業し、同年4月から30年10月まで同県香登公民学校の教員となり、全国農民組合(全農)岡山県連の青年部に加わった。1930年4月『中国民報』(岡山市・現在の『山陽新聞』)の記者となり、同時に全農全国会議派の岡山地方組織に所属し、非公然活動を行う。1940年4月に上京、川崎市の藤井製作所(のちの不二越精機)に入社し、敗戦を同社で迎える。

敗戦と同時に、藤井製作所従業員組合の結成をすすめて、1946年2月に同社従業員組合の委員長に就任した。1947年6月に退社して、同7月に産別会議本部の事務局に入り、機関紙『労働戦線』の記者となった。48年7月から病気休職。49年7月に復帰し『労働戦線』、および全労連機関紙『労働新聞』(のち『労働者』と改題)の記者となった。1951年5月『労働者』が発禁となったのち、『医療民主新聞』や日本国民救援会機関紙『人権民報』の記者となったが、肺結核が再発し退職した。治療・回復したのち1957年以降、世界労連の日本語版機関誌『世界労働組合運動』の編集に協力し、1961年タス通信社東京支局、67年ノーボスチ通信東京支社勤務をへて、在日ソ連大使館広報部に勤め、79年2月病気のため退職した。現在は、千葉県流山市の自宅で病床に臥しておられる。

江田三郎について

佐藤 さて、私の自分史の一端を参考までに簡単に申し上げます。私は1908(明治41)年8月岡山県邑久郡国府町(現在は長船町)に生まれました。県立第一商業高校を1927(昭和2)に卒業しまして、そのまま青年学校の教員となりました。

青年学校というのは、小学校の高等科を卒業したものの、いろいろな事情で中等学校(旧制)へ進学できない、主には農村青年を対象とした3年制の学校です。私は最初、その青年学校の教員となり、2年半ばかり勤め、次に岡山市に本社があった中国民報社に移って、10年ほど政治部の記者をしました。

当時、岡山県は労働運動より農民運動が盛んなところで、私も新聞社に入る前、青年学校の教員の時分に、農民運動のまねごとみたいなことを少しやっておりました。いま、江田三郎の名前がでましたけれども、私は全農の岡山県連の青年部の活動を非公然でおこなっていました。

『中国民報』に入って何年目かに、江田三郎が東京から戻って来ました。江田は明治40年生まれで、私より一つ歳上です。彼は当時、東京商科大学(現在の一橋大学)に在学し、大学専門部の3年生だったと思いますが、卒業を待ち切れずに農民運動に飛び込んだのです。これは、江田自身、直接私に語った言葉です。江田は当時、左派の若手経済学者として有名で人気のあった大塚金之助教授の弟子の一人でした。大塚金之助教授は野呂栄太郎と『日本資本主義発達史講座』(岩波書店、1932年5月 33年8月、全7巻)を出しています。

山上武雄と宮向国平

佐藤 当時、岡山県には山上武雄という、岡山県の農民運動史では決して忘れてはならない

1 産別会議への就職

(1) 戦前の活動 佐藤茂久次

『中国民報』の記者となる

本日はご多用中のところ、おいで下さり有難うございます。松尾さんは私どもの産別会議研究会のメンバーです。現在、文部省の科研費を得て、資料整理をご一緒させて頂いておりますが、佐藤茂久次さんとは今回初めてお目にかかります。本日はどうぞよろしくお願い致します。

佐藤 こちらこそ。

早速ですが、お二人が産別会議の本部に書記として入られた経緯、また機関紙『労働戦線』の編集にタッチされた経緯、などからお話し頂ければと存じます。その前に、簡単に略歴をご紹介頂ければと存じます。

私どもは、佐藤さんにつきましては岡山県の出身で、戦前、江田三郎さんたちと一緒に岡山県下の農民運動に参加され、のち『中国民報』(現在の『山陽新聞』の前身)の政治部記者をなさっておられた、と松尾さんからお聞きしているのですが。

佐藤 ええ。私は産別会議には片山内閣が誕生して間もなくのころ、1947年の7月に入りました。そして、48年の7月から49年の3月まで肺結核のため休職しております。私は49年4月に復職しましたが、間もなく『労働戦線』が全労連の機関紙『労働新聞』として発展的に転化し、それが潰され、責任者の荒賀文吉さんが占領軍の軍事裁判にかけられて投獄されたあと、さらに『労働者』の発行、それに対する弾圧・停刊そして壊滅までの付き合いでした。

だから、在職期間はそう長くはなかったのですが、日本労働運動の激動期であり、いろいろ貴重な体験をしました。

クリスチアンの農民運動の闘士がおりました。山上は日本農民組合（日農）の創立に一役を買い、岡山県連の最初の会長を務め、のち労働農民党の中央執行委員などをしてしています。奥さんは喜美恵さんといって、敬虔なクリスチャンでした。奥さんも日農 全農の活動家で、長らく日農の婦人部長をされています。私は『中国民報』の記者をしながら、密に山上の家に入り出ておりました。記者という職業柄、取材を名目にすれば、どこへでもでかけることができます。

いささか乱暴な色分けをしますと、山上は当時、政治的には運動内の右派で、左派には宮向国平（むやむき・くにへい）という古参の闘士がおりました。宮向国平は、1928（昭和3）年5月、日農と全日農が合同してできた全農岡山県連の会長で、無産政党関係では山上が労働農民党 日本大衆党 全国大衆党の系譜、すなわち合法左翼の左派 中間派に位置したのに対して、宮向は労働農民党 新労農党の系譜にあり、新労農党岡山県連の委員長だと思っています。私は新聞記者として、この二人には平等に付き合っていました、ひとからは“宮向派”と見られていました。

江田三郎は、このうち山上武雄の秘蔵弟子で、全農本部の青年部で活躍し、のち岡山県連の書記長となるわけです。

1930年代の後半期、山上一派の向こうをはって全農左派のリーダーとして活躍したのが黒田寿男でした。黒田さんは1936年と37年の2回、岡山地方無産団体協議会を足場に総選挙に出て当選しましたが、37年12月の人民戦線事件で検挙されています。このとき山上武雄も江田三郎も検挙され、岡山の農民運動は事実上、終息するのです。私は二足の草鞋を履くような形で、全農全国会議派すなわち宮向さんや黒田さんらの全農の左派に身を置いて、非公然の活動を行

っていたのです。

ちなみに、岡山の労働運動はその時分、中原健次が岡山合同労働組合のリーダー格で活躍しておりました。

北満の取材

『中国民報』を辞められたのはいつですか。

佐藤 1940（昭和15）年6月です。1937年12月の人民戦線事件は、私にとっても大きな転機となりました。あの事件で岡山の農民組合も労働組合も組織がガタガタになり、指導者は監獄に在り、あるいは第一線を離れ、山上武雄は死んでしまうし（1943年4月）、私も全農全会派での非公然の活動から身を引きました。弾圧が厳しく、農民運動どころか、言論活動すらろくにできない状況となりました。

新聞社を辞める1年前の1939年夏、私は体が弱かったので従軍記者とならずに済みました。その代わり、特派記者として約1カ月、満州の開拓農村の取材に行かされました。その当時、北満では謝文東を頭目とする“匪賊”が勢力を張っていました。そして、1923（大正12）年9月の関東大震災のとき大杉栄・伊藤野枝夫妻を虐殺した、もと東京憲兵隊の甘粕正彦が満州協和会に転じて実力者になり、匪賊対策で指揮をとっていました。この甘粕の帰順工作が成功し、謝文東が帰順したのです。私はその直後に、北満の開拓農村に入りました。

私は満州で1週間に1回ぐらい、匪賊の動きや開拓農村の実情を現地でルポルタージュ風の記事にして本社へ送っていたのです。ところが取材を終えて社に戻りしたら、憲兵隊が私の記事を問題にして社内でも騒ぎになっていました。私は岡山の憲兵分隊に呼び出されて取り調べを受け、始末書を書かされ、そんなことも重なって中国民報社を辞めたのです。

藤井製作所に就職

佐藤 それで私は上京し、川崎市の藤井製作所(のちの不二越精機)という工作機械の製造工場に就職しました。社長は藤井忠二というもと富山市の不二越鋼材(現在の不二越)の技師長を務めた男で、私の同郷の人でした。藤井は、もと九州帝大の工学部の助教授でした。彼は陸軍の推薦により“三顧の礼”をもって不二越鋼材の技師長に迎えられたのですが、実は内緒で川崎市にも自分の会社を設立して、小遣いを稼いでいたのです。それが藤井製作所なんです。私はその藤井忠二に拾われて、彼の会社に就職しました。ちなみに、1948年2月に細谷松太らが産別民同を旗揚げするわけですが、そのとき裏で活躍というか、暗躍というか、動いた人物に藤井哲夫がおります。藤井忠二はその藤井哲夫と従兄弟なのです。

産別会議の書記となる

佐藤 私は終戦後、1947年までこの藤井製作所に勤め、その後産別会議の本部に入っています。

紹介者はどなたですか。

佐藤 斎藤一郎です。斎藤君は戦時中、藤井製作所の下請工場の事務員として働いていて、私とは面識がありましたし、すでに産別会議の書記となっていて、彼とは何かと会っていました。

私が入ったときの産別会議の事務局長は、吉田資治さんでした。初め面接みたいな形で吉田さんに会ったのですが、そのとき彼が言った言葉は現在でもはっきりと覚えております。私は面接で、藤井製作所で戦後すぐに労働組合の結成をすすめ、従業員組合の委員長をしたことを話しました。そうしましたら、彼は「君、せっかく組合の仕事をしていたのだから、斎藤君の紹介というよりは組合の推薦をとって来てくれ

ないか。その方が君は活動をし易いからね」と言われたのです。それで、全日本機器労組藤井製作所従組の推薦という形を整えて、私は産別会議に入ったのです。

書記を採用する場合、組合推薦を前提としたルールだったのですか。

佐藤 その当時、フリーで入るといよりは、組織から組織へのルールを踏んだ人の出入りが確かにありましたね。吉田さんは、組織原則にとっても厳格でした。だから、私のような書記を採用する場合でも、組織的なつながりを重視したのだと思います。しかしながら、私は「斎藤一郎の紹介」という形が吉田さんには面白くなかったのかもしれない、と後で勤ぐりましたが……。

こんな経緯で、私は産別会議の書記となり、『労戦』すなわち『労働戦線』の編集部に入ったのです。『労戦』の編集部は、松尾洋さんが責任者で、ほかに小池賢三さんがおりました。長い話になりましたけれども、以上が、私の略歴であり、産別会議に入った経緯をご紹介します。

(2) 戦前の活動と略歴 松尾洋

戦前の活動

松尾 産別会議は1946年8月19日に創立しました。僕が産別会議に入ったのはその年の6月初め、だから準備会の段階から本部で書記として働いておりました。略歴については、のちにお話しします。

そして1948年8月に産別会議を辞め、9月に日本機関紙連合通信社に移りました。したがって『労働戦線』の末期、すなわち『労働戦線』が『労働新聞』と改題されて全労連の機関紙となり、さらに『労働者』と改題された経緯や、両紙の編集・発行事情については知らないので

す。

佐藤茂久次さんは『労働戦線』の末期『労働新聞』『労働者』と、産別会議の衰退期というか、まあ後半期の機関紙活動にタッチされております。僕が草創期から発展期、佐藤さんが後半期に活動されたわけですので、いちおうは全期間をカバーすることができると思っています。

さて、僕の略歴について簡単に申し上げます。僕は栃木県の下野中学の時代に、すでにナップの機関誌『戦旗』などを直接購入し、読んでおりました。まあ文学青年だったわけですね。中学時代に特高がわざわざ、私が『戦旗』を読んでいることを学校に通報したため、学校からは“危険人物”みたいに見られ、成績評価をはじめいろいろ差別されました。

下野中学を出て、法政大学の予科に進みました。のち専門部に進みましたが、大学でも文学関係のサークルや読書会に入って、活動を続けました。また社会科学の文献を読むうち左翼運動にも足を突っ込み、在学中に共青に入り、本部の印刷局で非合法の活動を行っておりました。そして第1回目の、検挙となるわけです。

当然、大学の方からは退学処分を受けました。釈放された後、僕はしばらく『文芸街』という雑誌に文学論に関する原稿を書いたり、編集・発行をしたり、まあ文学運動を続けておりました。

1936年7月、山田盛太郎・平野義太郎さんなど『日本資本主義発達史講座』に執筆・参加した学者に対する弾圧事件がありました。いわゆる“コム・アカデミー事件”と命名されていますけれども、僕もこの事件に連座し、日本共産党の再建活動に協力したとして治安維持法違反の容疑に問われ、検挙されました。2回目の検挙となります。

召集と除隊

松尾 僕は、1937年4月、思想犯保護観察法の適用を受けて釈放されました。僕が召集されたのは、翌38年7月のことです。召集され、中国・武漢方面の作戦に動員され、いわゆる“中支”を転戦しました。

1940年6月、僕は現地の漢口で召集解除となりました。現在の武漢市です。僕は、内地に戻っても特高警察の厳しい監視下に置かれることは明らかで、それはあまりかんばしくないと思っていました。だから漢口で除隊しますと、僕はそのまま現地の銀行に就職し、一時、商工会議所などにも勤めて経済調査などの仕事をしましたけれども、1945年8月の終戦まで中国におりました。

産別会議準備会に入る

日本に引揚げられたのはいつですか。

松尾 1946年4月末のことです。帰国して、まずどうやって生活していくのか、思案にくれました。とにかく職に就かなければならない。僕の学生運動時代のオルグで、文学運動の仲間でもあった人間に、藤原春雄がいました。藤原は敗戦となってすぐ、高橋勝之らと府中刑務所に在獄の徳田球一・志賀義雄ら政治犯の釈放運動をすすめ、日本共産党が合法再建されたのちは『赤旗』（セッキ）編集部の幹部となっていました。

当時、『赤旗』の編集責任者は松本一三（かずみ）さんで、その下に指導的なスタッフとして藤原春雄ともう一人、高橋勝之さんがおりました。なお、藤原は日大出身で、昔から一条徹というペンネームで歌人として知られていましたが、1960年代にいわゆる“反党分子”として共産党から除名されています。

僕は、当時墨田区に住んでいたその藤原春雄の自宅を訪ねて、職探しについて相談したので

す。偶然とは面白いですね。僕が藤原に職を世話してくれと頼んでいたそのところに、新聞単一(日本新聞通信放送労働組合)の役員が何かしていた小林一之が訪ねて来たのです。小林は『神戸新聞』の出身で、当時、細谷松太らと産別会議準備会の事務局の仕事もしておりました。藤原がその小林一之に、「おい、お前のところに私の友だちを入れてくれないか」と頼んだら、小林が「ああ、いいよ。入れよう」(笑)と即座に答えたのです。それで「じゃあ、一緒に行こう」と小林に言われ、僕は彼にくっついて有楽町の毎日新聞社7階にあった産別会議準備会の事務局に行って、そのまま入ったという経過です。

産別会議は、傘下の単産では最初の結成であった新聞単一(1946年2月9日)の提唱により創立をみえています。産別会議結成の準備も事実上、新聞単一の主導ですすめられ、責任者は聴濤克巳(きくなみ・かつみ)さんでした。聴濤さんは当時、『朝日新聞』の論説委員で、新聞単一の委員長をされ、産別会議の初代の議長になります。

産別会議準備会はこの聴濤さんを中心に、事務局長格で細谷松太さんがいて、小林一之がこれを補佐し、美濃部英司が事務局員で、弟の修がレポーター、ほかに女性事務員が2、3人おりました。

産別会議準備会の事務局に入るさい、聴濤克巳さんや細谷松太さんとの面接などはあったのですか。

松尾 ありませんでした。小林一之は、聴濤さんにも細谷さんにもとくに相談しないで「松尾君を入れます」と言っただけなんです。僕は「よろしく」と言って、その日から産別会議準備会の事務局員として雇われたわけです。準備会で、事務局員を探していたのかどうか知りませんが、現在だったらこんな勝手なことは通ら

ないと思いますね。

2 『労働戦線』の創刊

『産別会議準備会ニュース』

さて、本題に入りたいと思います。まず『労働戦線』の創刊の経緯についてですが、松尾さんは、産別会議の機関紙の創刊を準備し、あるいは編集発行する要員として入られたのですね。

松尾 そうです。僕の仕事は機関紙を発行するというにありました。僕は在職中、産別会議の他の部署に異動することなく、『労戦』の記者として、あるいは編集発行の名義人として機関紙活動に専念しました。

『労働戦線』には前史があるのです。1946年6月25日、正式結成へ向けて結成準備大会が開かれますが、これを前にして『産別会議準備会ニュース』という名称の新聞が発行され、結成までの動きや各単産の活動などを伝えました。いわば、産別会議準備会の機関紙といってもよいでしょう。新聞は確か、B4サイズの大きさで、ガリ版刷り・表裏2頁建てだったと思います。もっぱら私が原稿を書いて、当時芝・愛宕町に文工会館という小さなビルがありましたけれども、そのビルの中にあったプリント屋に頼んで印刷したものでした。

この『産別会議準備会ニュース』は、私の記憶では3回ほど発行されています。これが、いわば『労働戦線』の前身をなすものです。『産別会議準備会ニュース』は、私の手元には残っていない。この間、がんばって探したのですが発見できませんでした。

先日の資料調査で、その『産別会議準備会ニュース』を発見しました。ガリ版刷りの新聞は、やはり第3号まで発行されています。編集発行人は小林一之となっています。

第3号(1946年7月25日付)には、「ひらかれる産別会議結成大会」という見出しの記事があり、産別会議の大会日程や議事次第、代議員の選び方についての説明などを紹介しています。

ほかに、第1面では読売争議に関する記事、第2面は生産復興石炭会議の結成に関する記事が収められています。

松尾 1973年7月、労働旬報社(現在は旬報社)から『労働戦線』の復刻版が出ました。復刻版には、全労連の機関紙となった『労働新聞』や、後継紙『労働者』も収録しています。あの復刻版の原本は大原社研の所蔵のものであり、当時も『労働戦線』の前身を探したのですが、発見できませんでした。だから、『産別会議準備会ニュース』は労働旬報社の復刻版には入っておりません。なお、あの復刻版の解説は金子健太・荒賀文吉・杉浦正男さんとの共同討議をへて、私が執筆しました。

『報告』について

この機会に、是非お聞きしたいことがあります。いま、産別会議準備会の機関紙として『産別会議準備会ニュース』の話がありました。実はこのほかにもう一つ、本日は持参してきておりませんが、『報告』というタイトルのガリ版刷りの新聞もあったようなんです。

『報告』の創刊号の現物はまだ発見できないでおります。大原社研にありますのは、第2号(1946年8月6日付)から第13号(1946年9月26日付)までのものです。不思議なことですが、この『報告』も「全日本産業別労働組合会議準備会発行」と銘打たれ、「編集印刷兼発行人秋山武」の名義で発行されているのです。秋山武さんは、産別会議の書記で、のち細谷松太・三戸信人・大谷徹太郎さんら

と産別民同の旗揚げに参加された方ですね。松尾 そうです。

この『報告』は、第11号(1946年8月28日付)から「全日本産業別労働組合会議発行」となっています。『報告』は毎日、あるいは隔日にぐらいで、いわば速報のような形で発行されています。

僕は、この機会に改めてこの『報告』に目を通しました。例えば毎号の“事務局レポート”では、「結成大会の準備は着々と進んでゐるが、8月6日、聯合軍司令部労働課長コーエン氏から『結成大会で祝辞を述べよう』との約束を得た。大会三日間のうち、どの日になるかはまだ決まらないが、われわれの大会を飾るものとなるだろう」(第2号)の記事や、「読売争議応援デモ みんなで押しかけろ！」の“扇動記事”や、憲法研究会の集会への参加を促す記事が紹介されています。

さらに第5号(1946年8月9日)『報告』では、“我等の新聞『労働戦線』の発刊を援助せよ”の見出しで、「われわれの新聞は『労働戦線』と決定し、目下、松尾洋君が主となり、宿り込みも辞せず、一生懸命準備を進めてゐる。レポを送れ！ 基金を送れ！ われらの生々しい記事で全紙面を埋めよ！」など、産別会議の創立へ向けての準備や、各単産の活動、大衆集会の案内などを掲載しております。

お聞きしたいことの一つは、この『報告』の性格です。『産別会議準備会ニュース』と同じ産別会議準備会の正式な機関紙であったのか、あるいは内部情報紙であったのか、そのへんはどうだったのでしょうか。また『産別会議準備会ニュース』と『報告』の関係ですが、松尾さんはこの『報告』の編集にタッチしておりましたか。

松尾 『報告』についてはあまり記憶にないのです。産別会議の機関紙は『労働戦線』で、その前身は『産別会議準備会ニュース』です。『報告』はいわば部内紙的な性格のものであったと思います。

『労働戦線』の命名

1946年8月20日、産別会議の結成大会の最中に機関紙『労働戦線』が創刊されています。創刊号の題字の左わきに、囲みで「労働者の力だけで作られた労働者の新聞 全日本産業別労働組合会議機関紙」と記され、右わきにこれも囲みで「発行所 労働戦線編集部 編集・印刷・発行人松尾洋」とあります。そして、題字下には松尾さんが「創刊の言葉」を書いておられます。

まず、『労働戦線』という題字ですが、この題字はどなたが命名したのですか。中央機関の正式決定だったのですか。

松尾 『労働戦線』の創刊の準備は、私が産別会議の準備会に入っただけに始まりました。編集体制の確立、どのような紙面にするのか、編集方針を含めて検討しなければならないことが多々ありました。また、用紙は当時は配給制であり、政府の用紙割当委員会に申請して承認を得なければなりません、創刊号に間に合いませんから創刊号の用紙をどう確保するのかが重要な問題でした。

さて、『労働戦線』の名称ですが、産別会議の中央機関紙ですから、いちおうは機関による決定という手続きを踏まえたと思います。機関紙の題字を何にするか、最終決定にいたるまで産別会議準備会の内部でもさまざまな意見が出ました。例えば、戦前の日本労働組合評議会(評議会)や、日本労働組合全国協議会(全協)の機関紙に『労働新聞』があります。この伝統ある『労働新聞』の名を引き継ぐべきだという

声も確かにあったのです。しかし小林一之が、新しい時代の出発であり、新しい名前をつけるべきだと主張して、結局『労働戦線』に決まったのです。

当時、「民主戦線」とか「民主人民戦線」など、民主統一戦線の運動も高まっていたわけですね。

松尾 そうです。労働組合の戦線、あるいは労働運動の戦線というような意味合いで付けたのかもしれない。ところが、ナチスドイツの労働組合組織も「労働戦線」という名前であったことを後で知ったのです。

ええ、「ドイツ労働戦線」、ダーフ(DAF)といいます。日本でいえば、大日本産業報国会と同じ国民運動組織ですね。

松尾 われわれは、これはまずい(笑)と思いました。ナチスの「ドイツ労働戦線」と同じ名称では……。しかし、創刊したばかりの機関紙の名前を急に変更するのはどうもまずいということで、その時はそのままになってしまったのです。

創刊号の発行

松尾 当時、用紙は統制品で、新聞や雑誌の用紙は政府の用紙割当委員会に申請し、承認されないと用紙を購入することができなかったのです。もちろんヤミ用紙を買い求めることもできます。けれどもヤミ用紙は公定価格の何倍もの値段でありましたし、大量発行の場合は、購入量・価格の面でとても対応できないわけです。

それで、産別会議としてできるだけ早く政府の用紙割当委員会に新規割り当ての手続きをとることにし、当面はすでに用紙の割り当てを受けている新聞社から借りるなど工面することにしました。産別会議が正式に用紙の割り当てを受けたのは1946年10月の第4四半期からです。

ところで新規の申請の場合、どのような内容・形式の新聞であるのか、割当委員会が是非を判断するための材料の一つとして、試し刷りを作成して添付しなければならないことになっていました。要するに、新聞見本刷りです。それに、1946年8月19日から3日間、産別会議の創立大会が予定されていました。大会では綱領、運動方針、規約、大会宣言など、準備委員会が作成した各草案を討議するわけですが、代議員にもいわば議案書みたいなものを配る必要もありました。僕は、その創立大会へ向け『労働戦線』の試し刷り兼創刊号として第1号機関紙を出したのです。

創刊号の用紙はどうされたのですか。

松尾 当時、人民新聞社という進歩的な新聞社がありました。前身は民衆新聞社とって、敗戦の年の1945年11月ぐらいに『民衆新聞』を創刊し、最初の社長は日本社会党の左派で中央執行委員をしていた小野俊一という人だったらしい。のち人民新聞社に改組され、新聞の名称も『人民新聞』(1946年9月20日付第52号より『人民しんぶん』と改題)と変わりました。社屋は文化工業会館の中にあつて、社長は吉武三雄という戦前の全協の活動家だったと聞いています。

山川均が1946年1月10日、有名な「人民戦線の即時結成」を提唱しましたが、そのときに発表したのが『民衆新聞』(第11号)でありました。山川均や荒畑寒村らも編集委員に名を連ね、主筆は砂間一良さんだったようです。

松尾 僕は、民衆新聞社あるいは人民新聞社

については詳しく知らないのです。とにかく、用紙の割り当ては政府からまだ受けていませんでしたから、創刊号から第3号までは、後で返すということで人民新聞社から融通してもらいました。

創刊号は3万部発行しました。第2号、3号の発行も大体それぐらいの部数で、いずれも用紙割り当てを受ける前であり、人民新聞社から借用して発行したのです。用紙の割り当てについては、後でやや詳しく述べたいと思います。

創刊号の印刷は朝日新聞社に頼みました。新聞単一の委員長が朝日支部の聴濤克巳であり、そんな関係もあって朝日支部の印刷労働者が協力してくれました。

なお、創刊号の編集については読売争議団の協力を得て行ったこともこの機会に紹介しておきたいと思います。

読売新聞社の第2次争議は、1946年6月12日から始まります。6月から7月にかけて、争議団が社内から追い出されました。産別会議準備会の事務所は当時、毎日新聞社7階から麹町区有楽町の関東配電の焼けビル内に移転していました。その焼けビル内に電産労組も組合事務所を構えることになっていたのですが、そこへ急ぎよ読売争議団が入ることになって、産別会議準備会と読売争議団が同居したのです。それで、争議中の読売新聞の記者が創刊号の編集に全面的に協力してくれ、立派な創刊号ができたのです。読売争議団の方々からは、その後も『労働戦線』の紙面作りに指導と協力を得て発行をつづけました。

(つづく)